

色付相秋之露霜莫零妹之手本乎不纏今夜者

〔古今和歌集〕題まらず

萩が花ちるらん小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも

〔改正月令博物筌〕九月

露時雨露がおきまさりて裳すも袖も濡ればつゆも時雨のやうに思は

蓮みたり(中略)併薄墨の小宮や露しぐれ北枝

〔續古今和歌集〕十九

中務にかゝせられける御草子のおくに玉ざ、のはわけにやどる露ばかり

とかきて侍ければ

天曆贈太皇太后宮

みれどなを野べにかれせぬ玉ざ、の葉分の露はいつもきえせじ

〔伊勢物語〕上

むかし男有けり女のえうまじかりけるを年をへてよばひわたりけるをからうじてぬすみ出ていとくらきにきけり○中やうく夜も明ゆくにみればゐてこし女もなしあし

すりをしてなけどもかひなし

まら玉かなにぞと人のとひしとき露とこたへて消なまし物を

〔枕草子〕六

あはれなる物 秋ふかき庭のあさちに露のいろく玉のやうにてひかりたる

甘露

〔倭名類聚抄〕風雪

露○中 白虎通云甘露美露也降則物無不美盛矣

〔類聚名義抄〕七

甘露ツアマキ

〔延喜式〕二十一

祥瑞 甘露美露也神靈之精也凝如脂 右祥瑞

〔塵袋〕甘露ト云フハ何ナル物ゾ草ニヲク露ニシテアマキカ

初學記ニ甘露ハ仁澤也其凝コト如脂其美コト如飴一名ハ天酒ト云ヘリ東方朔ガ神異經ニ西

北ノ海外ニ有人長ケ二千里兩脚中間相去千里腰圍六百里但日飲天酒五斗ト云ヘリ又王褒ト

讀人まらず